萬葉集卷第九

雜歌

御製歌一首　泊瀬朝倉宮　或云岡本天皇

暮去者小椋山尓臥鹿之今夜者不鳴寐宿家良霜

岡本宮天皇幸紀伊國時歌二首

作者未詳

為妹　吾玉拾　奥邊有

玉縁　持而来　奥津白浪

朝雾尓　沾尓之衣　不干而

哉君之山道将越

一書

大寶元年辛丑冬十月太上天皇大行天皇幸紀伊國時歌十三首

作者未詳

為妹　我玉求　於伎邊有

白玉　依来　於伎都白浪

此一首見上然辞少異而年代相違故累載焉

崎者幸在待大船尓

真楫繁貫又掛顧

三名部乃浦鹽莫満

白浜

とゝくうらて人のいと
まこひとやうにおもひ
てやまてわれをまねく
をまてゝみなとへこぎ
入ぬ此三首者海人乎見
而戀来之情也

釣舟の為人乎見変来六
(釣舟乃為人乎見変来六)
釣舟の漕出而我を招湯羅前
(釣舟乃榜出而我乎招湯羅前)
為人乎見変来之情

湯羅乃前塩乾尓祁良志白神之
磯浦箕乎敷而榜動
黒牛方塩干乃浦乎紅
玉裾須蕪延往者誰妻
(湯羅乃前塩乾尓祁良志白神之磯浦箕乎敷而榜動黒牛方塩干乃浦乎紅玉裾須蕪延往者誰妻)

又安乃湖にさゝら
(又安乃湖にさゝら)
浪こしにきこき出て
(浪こしにきこき出て)
風莫濱紀伊へ一云
(風莫濱紀伊へ一云)
こゝにかくもとゝめ
助宅
(こゝにかくもとゝめ助宅)
こゝろなくさなき
(こゝろなくさなき)
ゆふてまんと安云
(ゆふてまんと安云)
今まつの紀伊
(今まつの紀伊)
名おもふ
(名おもふ)

うさひきこき出て
(うさひきこき出て)
ゆくさきさはりなく
(ゆくさきさはりなく)
こゝろなくさなき
(こゝろなくさなき)
こゝにかくもとゝめ
(こゝにかくもとゝめ)
助宅
(助宅)
こゝろなくさなき
(こゝろなくさなき)
風莫濱紀伊へ一云
(風莫濱紀伊へ一云)
かさなまれをの
(かさなまれをの)

風莫濱乃白浪徒
(風莫濱乃白浪徒)
於斯依久流
(於斯依久流)
一云こゝにかくもとゝめ
(一云こゝにかくもとゝめ)
来藻見人
(来藻見人)
無
(無)
此一首山上臣憶良類聚歌林曰
(此一首山上臣憶良類聚歌林曰)
長忌寸意吉麻呂應詔作此歌
(長忌寸意吉麻呂應詔作此歌)
我背児我便
(我背児我便)
将来放跡
(将来放跡)
出立之
(出立之)
此松原
(此松原)
中
(中)
今日香過
(今日香過)
南
(南)
山乎
(山乎)
越
(越)
跡白櫃
(跡白櫃)
之
(之)
藤白之三坂乎
(藤白之三坂乎)
手者
(手者)
所沽
(所沽)
香裳
(香裳)
我衣
(我衣)
敷能山尓
(敷能山尓)
黄葉
(黄葉)
常敷
(常敷)
神岳之
(神岳之)
山踊
(山踊)
庭聞
(庭聞)
往鉄
(往鉄)
木我野之
(木我野之)
葉者
(葉者)
今日
(今日)
散
(散)
濫
(濫)

竹葉 荊數 廬 爲有 歸者

[illegible] 木 國 之 苔 弓雖 之 響矣 びく〳〵 飛

[illegible] 底 取 廉 坂 さの上 ノ尓 曽安 留

[illegible] 城 國 尓 乃止 持 往来 妻 社

[illegible] 妻 依 来 西尼 妻 常 言 長柄

[illegible] 嬬 賜 おも 嬬 云

一云 [illegible]

此一首或云坂上忌寸人長作之

[illegible] 也さ 寺尓 若弓雖 の底 坂上 [illegible] 紀伊 [illegible]

[illegible] 大和 [illegible] 紀伊 雖 乃 國 [illegible]

[illegible] 後人歌二首

朝 愛 吉 木方 往 君我 信 上山

越 濫 今日 曽 雨 莫 零 根

後 居 而 吾 戀 居 者 白 雲

棚 引 山 平 今日 香 越 濫

詠仙人形容歌一首

作者未詳

常 之 陪 尓 夏 冬 往 共 衆

扇 不放 住 人

山

1683 1684 1685 1686 1687 1688

獻二舎人皇子一歌一首

作者未詳

妹手取而引與治拔手折
吾刺可用花鴨
春山者散過去共三和山者
春やまハちりすきぬとも君待勝
来ませとにおりおきまちてよ

泉河邊作歌一首

閒人宿禰

河瀬激半見者玉藻鴨
かくれせのしきるとされハもゝちを
散而在川常鴨
ちりてけるらむ

頭刺玉之嬬戀
乱郎良志此川
瀬介

ひこさの乃つまのこひなるとなも
みれとあかぬ川のせなる

鷺坂作歌一首

作者未詳

白鳥鷺坂山松影
宿而往平
名木河作歌二首

作者未詳

殺于人母在八方泊衣平
家者夜良奈羈仰

ころすとも人しあれやもしぬる夜へと
いへりハやもきみにしもあらなくに

名まし(ナガ)の八雲わけ山樓と
ふ山号の名まじりこと
ゆいわねとれば表と
ふりそしけの奥の名まの乃字小皆ねて
このりそしねて衣とあかりなす人もあれり楼のさまの
んせりそ家りやうんとこれやとものもいかゞ

うりとうへるにまく 乙安云在衣至 此海乃名ことく人のも名ホ
やとこ葉かりうへいかゞ中の名ともあまとこいかゞ海の処名ともに乃杏
人乃浜いうとうまふ明 ありうの磯をよけさうひくぬるくお
れりうへのりの句をれい遊ままとこいかゞ乃名まの乃字とやしと名
まの字の活よりうとうのあるくやん

高嶋(シマ)作歌二首 作者未詳

高嶋之阿渡川波者驟鞆
うきまれありとしりまゝいかゞけん

吾者家思 宿加奈之弥
わまいへなふとねるうへ
容在者三更 剌而照月
とりあしいよりものをさして照月の
高嶋山隠惜毛
たゝよまやうへらくあしも

紀伊國(シマ)作歌二首 作者未詳

吾戀妹 相依受玉浦 册
わうこまるにうあとさす。玉浦の海小
衣片敷一鴨将寝
ころもうへりもさいりもん
玉匣開卷惜夜矣
こうしけうくおこつうよ

神をそなれて離
かれてとまりにし人を
る我かもとへ
らむ神を離れて独やぬ
むとこ祇曰振
おうひとのさきさこ。
八雲れおもいたつ
れこそ古ふる仙覚
くひれ和ふる
とこ白こ云
こ云ふ
ふれる細き領巾
哥乃忘
ていつ
ふ

袖可礼而一鴨将麻

鷺坂作歌一首 作者未詳

細く比礼乃鷺坂山白管自
吾尓尼保波武妹尓示
われふれてしもよたむめさん

泉河作歌一首 作者未詳

妹門入出見川乃床奈馬介
いもりかとゐ遺
三雪未冬鴨
みゆきのこりいゆくこそうも

春時うつくしきよ雪ふるに梅を折をくる
こころしてうめをおりてをくれ
ねまいおまくめせ
かつてくるをきめ
めでゝ折をまき
あかぬまでこ家人
ふりみんこと家を
思ふ人乃多まの
多くよりくるかも
ゐて仙おこ
ゆきまよ
やこそる故こ
へひこ乃にのりて
家人は故ふ人は故ふ
りさに故ふ乃使れ
ハ用なめくし春花のよくれるも折をめすハ故ふ人乃にのりてんを

名木河作歌三首 作者未詳

友手乃名木之川邊半春雨
こゝろして乃あれのうへをそるさめ
吾立沾等家念良武可
ぬるてもめもいへおりめ
家人使在之春雨乃
いへいと乃にのりてるる乃め
興久列村吾平沾者念
よるまこおもをめすとおも
烘千人女在八方家人
のりをへもあれやもいへりの
春雨須良平間使尓為
そるさめすをまつりする。

1699 1700 1701 1702 1703 1704 1705

おと羽山雁鳴きこゆなり
て我里の秋萩さ妻問ひに
かく鳴くもあやに
す人もあれやとぞ
もの寂しき夕べ

宇治河作歌二首

作者未詳

巨椋乃入江響奈理射目人乃
伏見何田井尓雁渡良之

金風山吹瀬乃響苗
天雲翔雁相鴨

獻弓削皇子歌三首

作者未詳

佐宵中等夜者深去良斯雁音
聞所
左
月渡見
妹當茂苅音多
来鳴而過去
雲隠雁鳴時秋山
黄葉片待雖過
冬木成春部
拔手折多武山霧茂鴨
細川瀬驟祁留
波
冬木成春部
戀而殖木

御歌一首　舎人皇子

高屋於霏霰麻天尓
うち靡き雪も未だき春日尓
梅乎挿頭而遊者
今日之安抜毛

鷺坂作歌一首　作者未詳

山背乃久世乃鷺坂
自神代
神代従
徃来之道曽
吾者通
春者張柳
秋者散乱
道尓相人
毎
見恋
相者難
泉河邊作歌一首
作者未詳

春草馬咋山自越来流
水乎酌飲
雁使
宿過奈利
吾屋戸尓
雖通
君曽不来

獻弓削皇子歌一首

柿本朝臣人麻呂

御食向南淵山之巌者
落波太列可削
遺有
柯見我悲

1712　　　　　　　　　　　　1711　　1710

あるとかくよめる盛し涓訴に山襟山何工削成青巌之形をみてよめる合

わきもこかあかもひつち
ひつちてはひちてと
泥塗本かりもかけし
てとるてれりやかりて
おさめん倉とるてり
くらなしの濱は先を
泥日早苗をとる者
赤裳ともいふへく
といひ侍ふ氏のとす

二首　　作者未詳　或云柿本朝臣人麻呂作之

わきもこかあかもひつちてうへし田を
吾妹兒之赤裳泥塗（ぬりイ）而殖之田乎

かりておさめんくらなしのはま
苅将藏倉無之濱

もゝつたふやそのしまわをこきくれと
百傳之（イ）八十之島廻乎榜雖来

あはのこしまはみれとあかぬかも
粟小島者雖見不足可聞

うきもいひ出て如此あり　あれは只衣裳と心得へし　又泥塗をとするも
秋乃田れりかれはおちこゑとあるをもかろうし伊勢物語にはおちかか
ひろふとも云ふ又平由ゑかりし考はゑくとも寄をもよめりこは此みへやん
ことなき人をいやしきさるをも然するやすへいひ不志き物をもわりて
なくさまてるやうなよめるは渋宮れやかりてんへ及迷やうなるをみえ侍る
みてやくしよみうち執心とまり侍るなり

もゝ流ふやそれあまわ　此方の日本紀十五に謨謨逗扡甫奴底喩羅倶
慕與下暮とゝ侍る須るれゝ流ゝよふとよむ　百傳之との字かれと
八隅知之を志るもよむやかて見も侍るくを流しつとよむつまり也已る此集
第三りも流ふにはれ乃池と侍るをやかて仙にあまよあやうかに
よまれいとうふうくて古まあ流もく侍るやおやはゆみゆゝ八十と
いへん諷ほし多くの浮のめくりをも冊こきてりしも粟小島に
て面白しさしほ渡の名
あり　追考日本紀のと
も流うふも百傳之鼓
やねてゆしくへ鐸動之
驛傳之鈴のうこきる
つかるやし又日本紀に
百傳度逢縣とももよて
おもへの使釋かみゆ
いかれもくもあまき
心帰し

登筑波山詠月歌一首　作者未詳

あまのはらくもなきよひにうはたまの
天原雲無夕尓烏玉乃

よわたる月の入らまくをしも
宵渡月乃入巻恡毛

幸芳野離宮時歌二首　作者未詳

龍上乃三松山從秋津邊
きりうへのみねもあきつへふ
三船吉野うあり秋は夏秋は野乃
来鳴渡者誰喚兒鳥
夏へを云秋は野そ
落多藝知流水之磐鰯
八十おちつきちるあつまれ
おちつきちらあつまれ
與杼賣類與杼介月影
月乃みけゆ

一首 槻本(エニス モト)

樂波之乎山風之海吹者
釣為海人之袖變
けするあまのてつくるゆ

一首 山上或云川

白那跡之濱松之木乃手酬草
幾世左右二箇年薄絰濫
いくよまくみのさへへぬる

二首 春日

三川之淵瀬物不落左提刺(イさす)尓
衣手漬而曳渡乎

一首 高市

足利惡伐榜行舟薄高嶋之
足速之水門尓極滥鴨
あとりみをしてよるん

一首 春日藏(クラ)一云小辨作

照月遠雲莫隠島陰介
吾船將拍留不(レ)知毛

或記姓氏無(レ)記名字或備名号不(レ)俻(スサ)姓氏然依古記便以次載(ツ)之

如此類下皆效焉○或記姓氏無記名字○或記名字不記姓氏○或僧名号不記姓氏○已上六種
乃元仁年綿号(カ)

三首

元仁 馬也而 集 越来今日見鶴
うまなへてくうちつれてさくふこつる
芳野之川乎 何時 将顧
よしのの川をいつかかへりみん
幸 暁 去 日鴨 吉野川
さきくとそ暁去る日鴨吉野川
清 河原乎 雖見 不飽 君
きよきかわらをみれとあかぬかも君

吉野川 河浪 高見 多寸能浦乎
よしの川かわなみたかみたすきの浦を
不視 歟成 掌 戀 布 真國
みすもありなんこひしきまくに

一首

絹(キヌ)

河蝦鳴 六田乃 河之 川楊乃
かはつなくむつた川のかはやなき
根毛居侶 雖見 不飽 君鴨
ねもころにみれとあかぬきみかも

一首

鴛足 嶋足
鴛之 来之 久毛 知久 吉野川
おしのくるくもしるく吉野川
音 清 左右 見 二 文敷
おとのさやけさみてもふみしき

一首

柿本朝臣人麻呂 兼
古 賢人之 遊 吉野 川原 雖見 不飽 鴨
いにしへのかしこきひとのあそひけん吉野の川原みれとあかぬかも

一首

冊比真人
難波方 鹽干 由 玉藻苅
なにはかたしほひにけさ玉藻かる

海未通女等 汐名吉 尤林

うなれおとめら ふるの名ぞけさね

和歌 作者未詳

朝入 為流人 跡平見座 草枕

あさりする人とをみまく欲しけくに

客去人 介妻 不敷

こひゆくひとをとどめかねつも

一首 石川卿

名草目而 今夜者寐南 従明日波

あまくさめくことよいねなんあすよりは

戀鴨 行武 従前別 者

こひもゆくんいまわかれなば

三首 宇合卿 (手ヒトノ)

暁之夢 坊見作 挽嶋乃

石越浪乃 敷妙志所念

いそこすると今のさまこそうたてかりけれ

山品之 石田乃小野之毛 蕪原

やまとなるなでしこのそのなでしこを

見作哉 公之 道越良武

見てやすきもの

山科乃 石田社尓 布靡越者

山もなみいでてもとふ山みそれ

蓋 吾妹尓 直捐 鴨

けだしわれもよりてふあらんか

二首 山部赤人

毎春 棚引 尤夜深而

はるごとにたなびくまでにふけゆくを

吾 舟 将泊 等萬里 不知 毛

わがふねはてんとまりしらずも

碁師 (コレ)

雹

忍作雖一来不勝而水尾埼
おくれとまさりけるみをそつ清
真長乃浦平又顧
まもるらんかりこえ川

一首 小辨

高嶋之足利湖イカリノミナトヲ乎榜過而
しるきやまれのみをしとこきこる
鹽津菅浦今者将榜イホ
きよ川すらんいまのこころん

一首 伊保麻呂イホ

吾疊三重乃河原之礒裏尓
わすれてやみこのうらに秋乃浦よ
如是鴨跡可物鳴河蝦可物
かそうりかもとこるくうりかも

乙安云々ハ表裏中二重ノ牧ナリ八雲抄
みへ乃うらのとこと秋乃浦よ紀伴もあるいそへみへのか
そにかけるとこるいとハりなみ逃てまろ

こりもやう小槻ヲ
やまこえ来ぬ乃こころ
白雲乃なりもやまぬ心もち
なりてまろ八雲抄
乃川
大あらのこと
おもふこころを
大海とはさにつけ
吾野ふるこ安云
まつこにうりこと
いひかうりいゆ
末珠名ノ娘子
上総乃国の風俗乃
女人こけさうなり
みおうりうりに
古点ハまろうりこ

芳野作歌一首式部大倭ヤマトノ

山高見白木綿花尓落多藝津
やまこえ来ぬ乃こころ
夏身之川門雖見不飽香開
おりみ乃うらこと川こありわれ

一首 兵部川原カハラ

大瀧手過而夏箕尓傍禹而
おもふこころをるつみかうりてね
浄川瀬見柯明沙
きよき川せをみるつるさやけさ

詠上總末珠名娘子歌一首并短歌ヨメルカツサノスエノヲミナノ

水長鳥ミナカノ安房ホ
みおうりうり
末乃珠名者胸別之
すゑ乃珠名ハむねわけの

万九　古

よむ安房乃枕詞なり
ちなみに或説水中なるを
流つしものを中にとよむ
此集雅を多くよむれ
也るゆゑの為ハ水の泡の
浮きてやうなれハあそ
まつまてるにつくるえ
又ハ新点ニハ水なる音を
志るくるをよみて仙
覚ハ稀者なる事と
契冲乃説をあけ其證
ハ續日本紀ニ元正天皇養
老二年五月割上総之國
平郡安房朝夷長狭
四郡置安房國志れハ

吾妹腰細之須軽娘子之
わきもこうかうのすかるおとめの
其姿之端正尓如花
そのかたちのうつくしけさよ花の
咲而立者玉鉾乃
ごとゑみてたてれハたまほこの
道行人者己行道者不去
みちゆき人ハおのかゆくみちハゆかす
而不召尓門至奴指
てよはなくにかとにいたりぬさし
並隣之君者豫
ならふとなりの君ハあらかしめ
己妻離而不乞尓鑰左倍
おのつまかれてこはなくにかきさへ
奉人乃皆如是迷有者容
まつる人のみなかくまよへれハかた
艶縁而曽妹者多波礼弖有家留
ちよきによりてそいもハたはれてありける

長狭等此四郡をとりて安房につくといふことあるにつきて上総ノ
といへるにより又ハ彼地の貢物也と謂林家にいへり又仙覚ハ安房に続きる梓弓末
乃あまりとハ梓弓乃弭よハ金玉を付たる玉をいへるに続けれハなりてあまりよう
へと云ふかりまれ玉あまりとつけたりと此新点乃おちハいふまでもなし用
古点ハ上に付て安房に続くるとハ安房はまつぐる上総の末乃
珠名と云美女をいえとし梓弓とハ末といふいへん諷詞にはつきハかつさと同音也
むねわけ乃ひろき　兄安云妹乃胸乃ひろきこと　末乃珠名か腰細き故ハ也
すかるおとめ　すかるハ蜂也細腰ある虫也その蜂の腰のほそやかなるゆへいふ也
みちゆき人ハおのかゆく　彼女乃えみてたてる形ニめでて此女の門にきたりとく
さりにけれハ　旅人ハ此女をめてて我家にいぬるをわすれて
わかれ我家とぞ思はれて家路さしもわすれんとする也
かぎさへまつりし　兄安云かぎをまゐらせてよりきたると云也
いもハたはれて　人も皆くるしめる只彼女も亦たはれて風流なるよし

反歌
金門尓之人乃来立者夜中母
かなとにし人乃きたてハよなかにも
身者田菜不知出曽相来
身ハたなしらすいてそあひける
兄安云金門ハ鉄金よく
志する家也とあるところす
いにしへするとも又説石門

詠水江浦嶋子歌一首并短歌

作者未詳

春日之霞　時　尓　墨吉之
岸尓出居而　釣舟之　得平前布見者
古之　事曽（所念）　水江之浦
嶋兒之　堅魚釣　鯛釣矜
及七月　家尓不来而　海若
遇而　榜行　神之女
尓　邂　尓　伊許藝趙相　詭良
比（比）而言成　之賀婆加吉　緒
乃　かきけりね　常代

國風土記乃哥 美頭能睿能宇良志麻能古我多麻久志義 この哥名假名巳ニ
ミツノエとよみて此集なる墨江にても水江にもかけて當時より有西読也
わたつみのかみのむすめ 海神乃女とあるや日本紀ニ遂得大亀便化為女とあり
いこきわらひ見安云いむつる也 師説いこきは舟こきよるにて
ひそ 趁相とかけり礼記奔謂之妾とありて父母まうすして私にあふをそし
れといへわらいはらしまおふとふ也
かうしいふことあり 丈婦りあるへし しくしてひてさこの八一説に
かきつくねのいふまてし海神丈婦ら互てともに世に仍之日本記蓬莱山
せめるなれる人の白愚痴乃人とことをとまてみるさとを与ふ
海神の子を之れまるへし ゐそにつけて終らくは海神の宮也
こゝもてれぞしいふ かくしてこゝにたえるを父母に告んとおもひ
かすのことわさいはきるん 多帰りてあすまることそてまんと
すこしらくにそとく
かつひ固めし海神よ
仙女形見にちこてゐし
事しかゝつるをと

このくしげひらくなゆめとそこらくに
此篋 開勿勤常 曽己良久尓
かためしことをすみのえにかへりきたりて
堅目師事乎 墨吉尓 還来而

見ひとして開くこそ
従に老死するさまをいへ
むとなくし
里とみえつゝもあやしとこ
かやしこゝにあやしさと
同し辞林枝一雅済説六
かやしあとゝかわり心家
を読ね里をとこれらに年
久きつるまゝうれそ
絶ま見出つのしらく
かやしこかやめとも
又ふふやゝいとの也
家かゝくみゑのそのに
業ひろ年月をゝて
三年と云ひしなるも
彼王質の山中にて半

いへみれといへもみかねてさとみれと
家見跡 宅毛見金手 里見跡
さともみかねてあやしみとそこにおもはく
里毛見金手 恠常所許尓念久
いへゆいてゝみとせのほとにかきもなく
従家出而 三歳之間尓 墻毛無
いへうせめやとこのはこをあけて
家滅目八跡 此莒乎 開而
みてはもとのことくいへはあらむとたま
見手歯 如本来 家者将有登 玉
くしげすこしあくるにしらくものはこより
篋小披尓 白雲之 自箱
いてゝとこよへにたなひきぬれは
出而 常世邊 棚引去者
たちはしりさけひそてふりこいまろひ
立走 叫袖振 反側
あしすりしつゝたちまちにこゝろけ
足受利四管 頓 情消
うせぬわかゝりしはたもしわみぬくろ
失奴 若有之 皮毛皺奴 黒

日乃容　有之　髮毛　白　班奴　由奈由奈波
まて七世の孫の重
家うせめやこ　氣　庵倍　絶　而　後　遂　壽
ともろく家とうせめ　死　邦流　水　江之　浦嶋
やこうみこなん　子之　家地　丸
こう　いへこころなん

反歌

常世邊尓可住物乎剱大刀己乃心乎奈何可多米家牟
さけひ神乃　浦嶋仙乃　紫雲と　上古乃
ゆくへ見安云　師説　一云

續浦嶋傳云　王時紫雲於匣指　蓬萊飛去　老情忽來　紅涙湿白髮　蒼
仙洞之芳　隱淪海浦　遂不知所　終矣上略　鴨長明乃文明乃
乃あさもしらぬ神乃　浦嶋子　神乃　秋つる　ことこと
或説云　浦嶋子　雄和天皇乃天長二年乃　三百四十餘年を
ゆくへしれ　此説　已上略　ゆくへしれ　ことなりて
天長　万葉集乃　可怪或　可知　万葉乃
ことなり　日本紀乃　劉　蓬萊山　歴覩
仙境　語在別巻　浦嶋　誰乃
乃事　雑略
ことなり　注仙　ことなり
なり　ことなり　ことなり
ことなり　ことなり　ことなり
ことなり　ことなり　ことなり
ことなり　ことなり　ことなり
ことなり　ことなり　ことなり
ことなり　ことなり　ことなり
ことなり　ことなり　ことなり
ことなり　ことなり　ことなり
ことなり　ことなり　ことなり

見河内大橋獨去娘子歌一首并短歌

作者未詳

級照 庁足羽河之 左毛 塗

大橋之上 従紅 赤裳 数十

引 山藍 用 揩 衣服而

直 獨 伊渡 為る 兒者 若草乃

夫 香有 良武 橿 宴之 獨 蚊

将寝 間巻乃 欲 我妹之

来乃 不知 久

反歌

大橋之 頭尓 家有者 心悲久 哭児 将来

獨 去 兒尓 屋戸借 申尾

児武藏小埼沼鴨作歌一首

作者未詳

前 之 小埼 乃沼尓 鴨 曽

翼 霧 巳 尾尓 零 置流霜

平婦 等尓 有 斯

那賀郡曝井歌一首

作者未詳

三栗 乃 中尓 向有 曝 井之

那賀(ナカ)ハ紀伊乃郡の名也
或説ニ武藏(ムサシ)乃那珂(ナカ)郡
なといへと五代哥枕ハ也
此哥ニ曝井紀伊とい(へ)と
也安き三栗の八中こつゝん
いゝ也　仙覺同意景集日
本紀十云　みつくりの中
川枝の下居　伊呉栗是本かたちにつゝゐたる哥の心ハ序ある也　那賀と
いふ所ありさかしき井のわれ絶ぬをいひて　曝井乃ここに來も
くかよひたゆまじとし　追案日本紀乃三栗ハ中枝を云すし　此集ハ那賀の枕詞也
ことをいへるしいふ　祇園書云　ことを書とハ未ぬの書也　又安き書其所に居
よりうは隠れなき所をハ一ゆりまし　と云し　師説　なりおかりせつとハ
なき所ハ家ても見ゆる所と云　或説ニハ言ふりする世八とハ人を倶(アタ)き
結しよろくに妹の待らんとよめるといへり　手綱の濱ハ八守抄紀伊とそ
あめのこつる枕詞也　文
なるにるをせハ作く心可也

不絶　将(ム)通　彼所尒　妻毛我
たえずかよはむ　そこにつまもが

手綱濵(タヅナノハマ)謌一首　作者未詳

遠妻　四　高尒　有世婆　不知　十方
とほつましたかにありせばしらずとも
手綱乃濵能　尋　来名益
たづなのはまのたづねきなまし

春三月諸卿(モロ〻ノマヘツキミ)大夫(タイフ)等下(クダル)難波(ナニハ)二時歌二首

しらくもの　たつた
いふ枕詞也
をくらの峯　紀伊井紀抄
云とぞ　山ハ山様とそ
乃名に大和と云也
さきをせる　さくら
をさかせる也
ほつえハほつえ也
つまもしかれと或書ニ
物ならて　つまれ
いかつえハと和名集ニ
枝の字をかれと又物
なとらてよむ例多し
わかゆきハなぬかにハ
我行(ユキ)ハ往還(ユキカヒ)ハ七日
ふかるましきにて短

并短歌　作者未詳

白雲之　龍田山之　瀧上之
しらくものたつたのやまのたきのうへの
小鞍嶺尒　開乎為流　櫻花者
をぐらのみねにさきをせるさくらのはなは
山高　風之不息者　春雨之
やまたかみかぜしやまねばはるさめの
継而零者　最末枝者　落過去祁利
つぎてしふればほつえはちりすぎにけり
下枝尒　遺有花者　須臾者
しづえにのこれるはなはしましくは
落莫亂　草枕　客去
ちりなみだれそくさまくらたびゆく
君之　及還來
きみがかへりくるまで

反歌

吾去者　七日不過　龍田彦
わがゆきはなぬかはすぎじたつたひこ

ゆめ　此花　平國尓　墓葬
ゆめこれをなかせそ　ちくさの
竜田彦　竜田姫　皆風神　名れハ祭をわる也　日本紀ニ　天武天皇五年四月祭ル竜田風神
右ある人の手下　難波時ニあそ竜田をもミすゐ　雨降のふミ
竜田をこれいふ也
さそくるの
こゝろくもを　白雲乃　立田山平　夕暁尓
ゆゝしく　打越　去者　瀧上之　櫻
つゐやしまゝ　花者　開有　者落　過
つゐおもふ　郁里　舎弖　有者　可開継
こしてくる心　許知　斯智乃　花之盛
こちくハこゝろ　尓　雖不見
ここちくハこゝろ　左右　君之三行者　今西　應有
ここと　思ふ
ゆゝしく　及歌

行雲のんこと　雖
不見左右ニ出れと
も万葉のまゝ
乃多ひこと
ゆゝしくと読
いとゐあり
又安ちつさひ
さゐこと同れ列ゐ
ひりつなおと
明日還来　あ後
ちつやまを　八重九折
ゆハ杤ほとゝぎ集ゝ
九二家持八東等の所
ゝよりて或従ふ和
こゝ乃竜田山河を事
て峠のやうもゆこと

暇　有者　魚津柴此渡
いとゐあり　向峯之
櫻　花　毛　折未思物　結
さそくるの乃ゝ花もゝのと
難波経宿明日還来之時歌一首并
短歌　作者未詳
鳴　山　平射往　廻流　河副乃
ちつやまゝ　邊　道　従　昨日已曽　吾越来壮鹿
ゐりこゝ乃ゝ　一夜　宿有之柄二
ひとゝゐの子　櫻　花者瀧之瀬従落墮而流
さそくるの花ゝ　ゐ乃ゝ　之拾見
ゐぬまゝ　君
山七　之風　莫吹　登　打越而流
山おゝ乃風ゐゝ

名二負有社介風祭為奈
名りおつるよりふかさまりせる

反歌

射行相乃埜上之蹈本介雨平為流
いまこりのりはのふるとにさせる

櫻花平含見兒毛欲得
桜乃花をふせんこもかも

明日還来と気うつつ心をけく
君うへんこも日まておへおもふ

名おおつるもりか風まりのふおつる社乃ふ折して凡まそん
そへせるのせんこうさまりりのふおつるふおへ立田乃

まりつと風まりこの風神の心をまこて風のあらかくめやうよまるこ
いゆきまひの坂乃いの神をへゆきまひ乃坂紀伊おひのれうそへ

つまてもふおる坂まや

登筑波山二時作歌一首并短歌

検税使大伴卿

衣手常陸國二並
筑波乃山平欲見一アセヨリミ君
来座登歟介汗可伎奈氣
木根取嘯登岑
上平君尓令見者男神毛
許賜女神毛千羽日給而
時登無雲居雨零筑波嶺平
清照言借石國
真保良平委曲尓示賜

万九 廿二

仙田筑波山乃最頂(サイチヤウ)に
わけ入りをへと雄神(ヲノカミ)
女神(メノカミ)とやらしめん安置おの
くにの神として筑波ね
二乃尾の御をし琴(コト)の音を
わけくきに汗うき酔(ヱヒ)き
そのはとみんゆけ山ちに
君のまをますとひゑ
みなえすれいあるとあるい
大伴にゑくりゑまや
詩にも公を貞(サダ)めり
仙田筑波まれ上をさんそ
上れハ皇(アヲ)く手く汗うきころ
よ家ねかかけるかうちのかの
壁賦に劃然(カツゼン)長嘯(チヤウセウ)スル東坡
おのみゆきのてり 大伴

歓 登 級之緒解 而 家 如
解 而 曽 遊 打 靡 春 見 麻
之 従 者 夏 草 之 茂 者 雖 在 今 日
之 楽 者

うれしそと ひものをときて いへのこと
まきくらあふ うちなひき まへみよ
しかれハ なつくさのしけくハあれと けふ
のたのしさ

反歌

今日 介 何如 撥 筑 波 嶺
昔 人 之 将来 其 日 毛

けふの日に いかてかおよはん つくはねに
むかしのひとの きけんその日も

おりきさうなるれハ ねうてりけるうのかりと云
の松の枕詞 ねとりハ絶の曲 東坡の赤
ゆきのさゆきをゆきのさり 仙覚ハ東

此乃男女筑波山よりのかりて嬥歌(カヾヒ)乃会をあることをゆるしたまふ
にみと行しけれ此事乃内乃嬥歌会をよめるうたにハさもゆるせし
けうとゆハゆして呼ひとの行ちけりまへ守らるし
ちかひものく 袖中おうりちからひハちかう心なつりちうひとり枕
四方や時あつねるをかしゝハねを清め照て ことよひのよとこ
ここよひし此乃ちかうを中分うたかき 此乃ちおうを秀曲にあふしの
ひものをときて 此乃う讃岐すかこを神のかし心安てとそ
家だてとしまうう 家のことハ我荷れ心安きうらく 紐を解てとて
うちるひきまえりまん枕詞春山をえんかり安あうしろの
をとさとや

けふの日にいへをよみん むかしの人は知らすと見て逢ひし
人をいふあるも 大伴のこの山うりふの よふハ有ま
せりとしちあうりくふ乃よのさこいふを守て後及あし
此あまりて安三嬥
歌まつりのせしとて
二用ひうし

詠霍公鳥歌一首并短哥

作者未詳

鷽之生卵乃中尓霍公鳥
うつせみのいこのもるかおそくさす
獨哥生而已父尓似而者
ひとりうまれてさつちふかみそを
不鳴イあすし已母尓似而者不鳴イあすと
あるやさそおそくおとやは
宇能花乃開有野邊從飛翻
うのはなのさくるのへゆとひかへり
來鳴令響橘之花平居令散
きなきとよもし橘乃はなをおちら
終日闇吉幣者将為
ひねもすくらけとさくらしまいはせん
遅莫去吾屋戸之花橘
とさくおりまさむわかやとのはなたち
尓住渡鳥
ちるまてすみわたれとも

反歌

霰之雨零夜平霍公鳥
かまきりあめふるよをほとときす
鳴而去成可怜其鳥
なきてゆくなりあはれそのとり

登筑波山歌一首并短歌

作者未詳

草枕客之憂平名草漏
くさまくらたひのうれへをなくさむる
事毛有武跡筑波嶺尓登而
こともあらむとつくはねのへにのぼりて
見者尾花落師付田井尓
これはおはなちるしつたのゐに

よもれ作るを者乃字もよめるくさやふかくよもれくんおなつ
基後乃假用おうもの奥後おのこころくよもれれの故実ま作るや
林乃義をおもくゆきふかくみ作るや
まひいぜん 那麻よりのもとせんとつりまくゆきくる返ぬせんこと
住渡れる者乃字もよめるくさやふかくよもれくんおなつ
基後乃假用おうもの奥後おのこころくよもれれの故実ま作るや
林乃義をおもくゆきふかくみ作るや
まひいぜん 那麻よりのもとせんとつりまくゆきくる返ぬせんこと

反歌

極霧之雨零夜平霍公鳥
かまきりあめふるよをほとときす
鳴而去成可怜其鳥
なきてゆくなりあはれそのとり

登筑波山歌一首并短歌

作者未詳

草枕客之憂平名草漏
くさまくらたひのうれへをなくさむる
事毛有武跡筑波嶺尓登而
こともあらむとつくはねのへにのぼりて
見者尾花落師付田井尓
これはおはなちるしつたのゐに

雁泣毛　寒　来喧奴　新治
かりがねも　さむくきなきぬ　あをやまの
乃鳥羽能淡海毛　秋風介　白浪
もみぢのいろに　うつろひぬらし
立奴筑波嶺乃　吉　久平見
しらぬひ　つくばのやまを　こえてゆかば
者長氣　念積来ム　憂
あがまつひとは　なげきつつこむ
者息奴
そでやぬれなむ

反歌

筑波嶺乃　須蘇廻乃田井尓　秋田刈
波嶺　　　　　　　　　　　
いこねがてにと　わがまつらむぞ　あきのよの
妹詩　将遣　黄葉
つきをかたぶく　もみちばのごと

童蒙抄云　すこわれ田井こゐ山乃　すめろ
乃田井とよめるも　ことに童蒙抄の類聚一万葉をもて
ことわりをかけり　もっともかの抄の浮
彩兵ハ　なり

へやんごとなきうたよみと
耀歌會　注耀歌者
東俗語曰賀我比ト
紀東耀玉篇云往來
貌ここ男女ゆきつかひ
うたひあそぶまで
集六ノ難波宮作
歌ども多きにより
ここもとる
仙初云坂より東之
諸國男女春花開
時秋葉黄節飲食
齋奠を相うながして
おのおのひまもとめ
ひい賊ごと音曲耀歌
會ハおのおのとるところ

登筑波嶺爲耀歌會日作歌一首并
短歌

高橋連蟲麻呂

鷲住　筑波乃山之　裳波服津乃
其津乃上尓　率而　未通女壯
あまたつどひ　かがふかき　嬥歌尓
士之徃集　加賀布　耀歌尓
これゆまたてと　いこふとも　他妻尓
吾毛交牟　吾妻尓　他毛
さはにあまとも　なほわれは　妻
言問　此山乎　神
こそ　このやまを　うしはかみ
從來　不禁　行事叙　今日耳者
めぐしもな　さやりたまひそ　今日耳者
目串毛勿　事毛　咎
めぐしもな　さやりたまひそ　今日耳者
耀歌者東俗語曰賀我比ト

反歌 男 神尓雲立 登 斯異礼雫

おりのみか雲もよりこし乏しかりけり

北通 友 吾将友 哉

ぬばたまをそもわれくらめやも

三諸之神南備山賢木

秋萩の枝もとをゝに

萩を鹿九妻こそ

秋萩の花妹が垣根は重

日本紀はゝくことよりもしるしもる心古事紀ニ

大己貴神の将ニ乎去

まほ書ゝさゝりてゝ

あけくれおこ書よ

ゐてゆもを欲心

あすのたにつばめ

もしゆもくおこ

詠鳴鹿歌一首并短歌

柿本朝臣人麻呂 或云作者未詳

三諸之 神名火邊乃山尓 立向

みもろの神名火山にたちむかひ

三垣乃山尓 秋芽子之 妻巻 六跡

みかきなす秋萩つまを

朝月夜 明卷 鷲

あさづくよあけまくをしみ

乃山響 令動 喚立 鳴毛

のやまひゞかし鳴かもと

明日之 夕 不鞘有 八方 足日木之

あすのたにつばめもさやに

山彦 令動 呼 立 哭毛

やまびこもとよめもなきぬ

一首此歌似聞人宿祢大浦之歌而未一句異也因以累載之

倉橋之山平高欲夜牢尓
出来月之片待難
沙彌女王

七夕歌一首并短歌 中衛大将藤原朝臣宅作之

久堅乃天漢尓上瀬尓
珠橋渡之下瀦尓船浮居
雨零而風不吹登毛風吹而
雨不落蓑不令濕而
久堅乃天漢尓上瀬尓
珠橋渡之下瀦尓船浮居
雨零而風不吹登毛風吹而
雨不落蓑不令濕而
作者未詳

万九 卅八

来益常玉橋渡須
反歌
天漢霧立渡且今日且今日
吾待君之船出為等霜
相聞
退筑紫國時歌一首
振田向宿祢
吾妹兒者久志呂尓有奈武尤手乃
吾奥手尓纏而去麻之乎
[illegible]

於久礼居而吾者哉旦戀稲見野乃
おくれゐてわれはやこひんいなみ野の
秋芽子見都津去武子故尓
秋はぎをきつゝいなんこゆくろ

獻弓削皇子歌一首

神南備神依板介乎杉乃
かみなびの神よりいたをすぎの
念母不過戀之茂尓
おもひもすぎこひしげきに

獻舎人皇子歌二首

柿本朝臣人麻呂

妹乳根乃母之命乃言尓有者
いもちねのははのみことのかにあれば
手緒長憑過武也
たをながくたのみすぎんや

泊瀬河夕渡来而我妹兒何
はつせ川ゆふわたりきてわぎもこが
家門近春二家里
いへのかどちかくはるにいへりけり

石川大夫遷任上京時贈歌二首

檜磨娘子

絶等寸笶山之峯上乃櫻花
たえすきの山のみねのうへのさくら
時開春部者君乎将思
ときさかんはるへはきみをおもはん

君無者奈何身将裝餝匣有
きみなくはなにかみをよそはんくしげある
黄楊之小梳毛不念
つげのをくしもとらんとおもはず

童蒙抄云此歌ハ黄楊の木ハ
童蒙抄類聚万葉抄云此歌ハ

藤井連遷任上京時贈歌一首

娘子

従明日者吾波孤悲牟奈名欲乎山能
宇須久波奈礼許之奈乎可母

石踏乎之君我越去者

和歌一首

藤井連

余乎之麻勢久可願名欲乎山
能知乎之麻勢比左礼奈利牟也母

石蹈乎之接亦毛来武

鹿嶋郡苅野橋別大伴卿歌一首并短歌

高橋連蟲麻呂

牡牛乃三宅之酒尓指向
鹿嶋之埼尓桧册塗之小船儲
玉纏之小楫繁貫夕鹽之
満乃登葺美尓三船子呼阿騰毛比立而
喚立而三船出者濱毛勢尓
後楽居而反側戀香裳
袴居而足掻之泣耳八拘哭
海上之共津乎指而君之巳藝歸者
津路乃名木名六時毛渡七六

反歌

何とゆひらて
仙日今八と云事てと
よりてくハ舟子らもとよりてこと
ともにせり 座にも世話ともせむとに同湊の舟也
さそれ居てしあとも此字也 とくれなとして
うみのちのあさきみんいふも うちハ海路之津ハ此字して多きて
海路和みん時にも船
出すなりしと
雪こそハすら日消らめ
雪こそ春の日に消や
其なくし消うせたるか
やこともひ通ねと
松かへり志ひてあるか
松かへりて椎といふとそ
て三栗をよみかり
仙日頭子亜てある

かくたつなみにふなですへしや
加九 多都波二 船出 可為 八

1782
與妻歌一首　柿本朝臣人麻呂
雪こそハはる日きゆらめこゝろさへ
雪己曽波 春日 消良米 心佐閉
きえうせたれやことも かよはぬ
消失多列夜 言母不往来

1783
和歌　柿本朝臣人麻呂妻
まつかへりしひてあれやはみつくりの
松反 四臂而有八羽 三栗
なかのほりこぬまろといふやつこ
中上不来 麻呂等言八子

とよむきそ 何れやハとよめり云はさこえとも世にく心憑点するとよめ
いくとにいミ三栗をのやすふますとも兎りいふくことにまるし又按云
まろといふこハいふくことし但又安ハ松かへり志ひてあれやハとよめり
志ひくハ志ひて読まくあれやハの字ハ可有まりや此方云惟とも

1784
贈入唐使歌一首　渡海年紀未詳
作者未詳
わたつみのいつれの神をいのらはか
海若之 何 神乎 斎祈 者歟
ゆくさもくさもふねのはやけん
往方毛 来方毛 船之早兼

わたつみハいつれの神の尓
こむけハいのる也
さきくさハゆくさもくるさも也

1785
神亀五年戊辰秋八月
続日本紀十日神亀五年
八月壬申太政官議奏
改定諸国史生博士医
師員史生大国四人上
国三人中下国二人中略
諸国の史生をしゐみの

神亀五年戊辰秋八月歌一首并短歌
笠朝臣金村
人となることはかたきをわくらはに
人跡成 事者難乎 和久良婆尓
なれるわかみハしにもいきも君かまにまと
成 吾身者 死毛 生毛 君之随意常

念作有之間亦風蟬乃
おりいたくあいてなくうつせみの
代人有者大王之御命恐美
よのひとなれはおほきみの
天離夷治尓登朝鳥之
あまさかるひなおさめにと朝鳥の
朝立為管群鳥之群立
あさたちつつもむらとりの
行者留居而吾者将戀
ゆけはとまりゐわれはこひん
奈尓乃見
なにの見
尓久有者
にくあるものを

反歌

三越道之雪零山平持越日者
こしぢの雪ふる山をこえん日は
留有吾平戀而小竹葉音
とまれるわれをうけひくしのはおと

天平元年己巳冬十二月歌一首

仙宮(ミヤコ)三越路(コシヂ)とおほせども
越前越中我(ワ)はなほ
これからのちと云(イ)ふ
うつせみの世人なれば
世人(よひと)なるらし
王命(おほきみのみこと)とて
王命にかまけて布勢の
古家(ふるへ)も見ねば
こころもいたれぬ
古(ふる)へおもほゆ
いにしへ思(シヌ)ばと
なつかしむことに
なほくおもほゆ
心のまま

反歌

并短歌 笠朝臣金村

蟬乃世人
うつせみの世人
有者大王之御命
あれはおほきみの
恐
かしこみ
弥磯城島能日本國乃
やしきしまの日本の國の
上振
うへふり
里尓満雖
里にみつれど
紐不解
ひもとかず
寐半為者吾衣有
ぬるよはすれはわが衣
服者奈礼奴
へはなれぬ
戀者雖益
こひはますとも
色二
色に
山上復有山者
山の上また有山は
可知
しるし
冬夜之明毛不得呼
冬の夜の明もえぬをいもねずに
五十母不宿二
いもねずに
吾妹矣戀流
わぎもこが戀ふる
妹之直香二
妹が直香に

反歌

振山 従 直 見 渡 京 一二首

寐不宿 戀 流 遠 不有 介

吾妹兒之 結 手師 級平将解 八方

絶者 絶 十方 直 二 相 左右 二

天平五年癸酉遣唐使船發難波入
海之時親母贈子歌一首并短歌

姓名未詳

秋芽子乎 妻問 鹿許曽一 子

あきはぎを つまどふしかの こゑきけば
吾 鹿兒自物 師乎尚 持有 二子

わが
吾

獨子之 草枕 客 二師 往者

ひとりこの 旅のまくらに ともしかる
吾思 取四手而 忌日管 木綿

わが
吾

子真好 去有 欲得

わがこまよかも あらまほしかる

反歌

客人之 宿 将為 野介霜 降者

旅人の やどりせむ野に しもふらば
吾子羽裏 天 乃鶴 群

わがふところに あまつたづ むれ

續日本紀十一日天平五年閏三月癸巳遣唐使多治比真人廣成辭見授節刀夏四月己丑遣唐四船自難波津進發

天平五年癸酉遣唐使

しろたへをなして　お涙　ゆふかりなりしは朱紱ならむとおもふて
すくしゆきくかおまことにしくおもへりゆきつきぬりしとこ
ことひ人乃やらかせん　又安云えほしめいはもとめ之つるおもひいはもひつきて
玉東我子乃振乃あり乃鈴ニ乳山乃ハ京内群鶴も羽をおもひつくとえ
ところせくし密切のおもひ
ほしき人乃人乃ことなる
美女をかゝめて玉女を
とりかへてもし詩乃
有妾如玉こいふるれと
又此女の名を白玉こ
いへしもやらんし
ことのをの事と　又安云緒
をもの事と云ふ師説言
語をとこのおもひと云
心緒とはこころの如き
ことをことにいふ又安

思娘子作歌一首并短謌　田邊福麻呂

白玉之人乃其名矣中中二
しらたまの人乃そのなをなかなかに
辭緒不延不遇日之
ことのをのはへてあはぬ日乃
數多過者戀日之累行者思
あまたすきれはこふる日のかさなりゆけはおもひ
遣田時乎白上肝向
やるたときをしらにきもむかひ
心摧而玉手次不懸
こころくたけてたまたすきかけぬ
時無口不息吾戀
ときなくくちやますわかこふる

兒矣玉釧手尓取持而
こをたまくしろてにとりもちて
真十鏡直目尓不視者下檜山
まそかゝみたゝめにみすはしたひやま
下逝水乃上丹不出吾念
したゆくみつのうへにいてすわかおもふ
情安屁歟毛
こころやすきそも

云こつきもこえまた
きもむかひは肝のきはの
物をいひ肝のきはを云ふ師説胸乃肝の
あたりをいふなり
かけぬときなく又人の
くちやますにくちをやますなる
くちやますはくちをやますといふなり
こたまくしろ　玉釧と云釧乃字おもひくしろ乃訓は袖中抄は玉まくしろ
てにとりもちてはたまくしろ乃訓と仙日玉釧と玉たまきと
和名抄十巻に長表ひわりを云ふれとも手をまきに
まうかはしてあそすはといふ沢田之我子兒をかはれそち
ひのふむすは見そのおきまあしこしてゆは直なる
まてひは　摂津続紀之津國風土記云昔有大神云天津鰐化為鷲
下止此山十人往者五人去五人留有久波乎者來此山伏下樋而届於神許
從此樋内通而禱祭由是曰下樋山下樋山下乃あハ上よむとの沢注

反歌

垣保成人之横絆繁
香裳
なきかるすゝ人乃
中を〳〵こゝろさうら
するをゆゝしきことも
いゝつゝあれこゝし
こゝろかり月かさりも
さねこゝれをこゝま
こゝにこもれすゝ人
きく〳〵逢ねとも併立
てこゝもれすく

宇治の離宮 應神天皇
の太子仁徳帝乃弟
日本紀十并十一巻三年
所修を兄帝と譲て
うせさせ給ふ

いゝつゝかりつゝゆきの

日數多月乃經良武
月
かねもあまりへぬらん
立易月重而雖不逼
核不逢忘面影思天
さねるすゝれをおもかけみて

挽歌

宇治若郎子宮所歌一首

柿本朝臣人麻呂

妹等許今木乃嶺茂立
嬬待木者古人見祁牟
いもらこもいまきのねをしけゝらしいにしへひとのみけむ

紀伊國作歌四首

柿本朝臣人麻呂

黄葉之過去子等手携
遊磯麻児者悲堂
もみちはのすきゆくこらたつさはり
あそびしいそをわれかなしむ

鹽氣立荒磯毛者雖有
往水之過去妹之古見師
しほけたつあらいそもわれはゆくみつの
すきゆきいもがこみしを

古家乎壊毛人将成
古家ゆ毛人成
ふるいへをこぼちもひとのなさめやも
ふるいへにすみけるひとのなれとをるへく

姉らとゝもに今まてありつゝ今をいふとて妹うせぬ
訓なとなし今まで乃哀に八重垣紀伊とゝもに葬ぬ
らひそ今まのみなの歌七首乃内なり乃字流の字のとゝ
乃字とさしかへ今まのみなの歌七首乃内なり乃字流の字のとゝ
くんとゝ此の字のかきかへたるにあらす

紀伊國作歌四首

柿本朝臣人麻呂

妹等許今木乃嶺茂立
嬬待木者古人見祁牟

久漏牛 方乎見 依府 下

玉津嶋 隠之裏未之 真名 仁文

尓保比 去名 妹 鯛 隊

過足柄山見死人作歌一首

国邊福麻呂

小垣内 麻 矣引干 妹名根之

作儲而 暇 異六白細乃 級緒毛不解

一重結 帯矣 三重結 苦待伎余

仕奉 而 今谷 裳國尓 退而

父姚毛 妻 矣毛将見 跡 思乍

独 邦阜君者 鳥鳴 東 鶏國能

神之三坂尓和久 霊乃 眼

寒 伊等毋烏 玉 髪者乱而

卯閇跡國矣毛 不告 家閇跡家

矣毛 不云 益 荒 丈乃 去

此間 偶 有

足柄明神乃 御坂尓 手向 相模之

神乃上波 伊可尓 幣者 奉者 平久

安久 神霊乎 令給跡 申而 過去

我妹子 我 手乎取而 石床 根枕

相宿 妻矣 荒 鬼神 奪等 隠

いにしへ乃よみすくりけりと
哥林良材云昔津の國に
あしや乃里にうなひおとめと
いふ女ありけり それを二
人の壮士よはひけるに ひ
とりの男乃名はちぬ
男と云一人をはうなひ男
と云けり 男乃心ざし
はおなしやうなれは
女おもひわひて親の上
にて深く自害して
うせぬ 其時二人の男も
同く自殺せしかは
それ人を葬るに
女乃墓を中に築て
二人の男の塚をおけり

1801

過葦屋處女墓時作歌一首

田邊福麻呂

古之 益荒丁子 各競 妻問為祁牟 葦屋乃 菟名日處女乃 奥城矣 吾立見者 永世乃 語尓為乍 後人 偲尓世武等 玉桙乃 道邊近 磐構 作冢矣 天雲乃 退部乃限 此道矣 去人毎 行因 射立嘆日 或人者 啼尓毛哭乍 語嗣 偲継来 處女等賀 奥城所 吾并見者 悲喪 古思者

いにしへのますらをとこのあひきそひ
つまとひしけんあしのやのうなひをとめの
おくつきをわかたちみれはなかきよの
かたりにしつゝのちの人しのひにせんと
たまほこのみちのへちかくいはかまへ
つくれるつかをあまくものそきへのかきり
このみちをゆく人ことにゆきよりて
いたちなけかひある人はねにもなきつゝ
かたりつきしのひつきくる
をとめらかおくつきところわれさへに
みれはかなしもいにしへおもへは

双ていけるとなり
乙女乃おきつきとは
[illegible]おきつきとは塚の
名也又花山院の大和
物語にもしるされて
[illegible]
萬葉集乃奥の哥にも
[illegible]
世語りに後人のしのひ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

反歌

1802

古乃 小竹田丁子乃 妻問石 菟會處女乃 奥城叙此

いにしへのしのたをとこのつまとひし
うなひをとめのおくつきそこれ

1803

語継 可良仁文幾許 戀布矣 直目尓見兼 古丁子

かたりつくからにもこゝたこひしきを
たゝめにみけんいにしへをとこ

いにしへのさゝたをとこ 哥林良材小竹田は昔男の氏なりときこゆ 仙抄六
[illegible] 詞の助 [illegible] 衛の鑑

せり或訓ニ笹田ハ志の田とよむ（こをとさて田とよみきくれり和名おもかれとし）又鑒ス
かよりつくりしかも　昔摂津に住侍く呼よあふらまひ何くめハろこりく
此しきを直よ目かみつくん思乳心こてやよとし　て月ハ直ふ見るゝ迄
ちくれくゝあのまかく
兄要云う子さうすくの
子ともかつし丑東生の宮迄
そむりか兄要云そし
むりふハ兄すし　丑東箸
一あ二ツあれハこく
あせのみさと　すと云う
ちむよりらうことこり
神乃むりこなうひ弟て
神ハ常ゆて不滅し人乃
命ハ神と共かハわりらむ
りとそまし要ともし
なりしのみつもの也

哀（カナシミ）弟ノ死去ヲ作ル歌一首并短詞

田邊福麻呂

父母賀成乃任尓箸向
ちゝはゝがなしのまに〳〵はしむかふ
弟乃命者朝露乃銷易杵
おとのみことはあさつゆのけやすき
壽神之共荒競不勝而
いのちかみのむたあらそひかねて
葦原乃水穂之國尓家無
あしはらのみづほのくにゝいへなみ
哉又還不来遠津國黄泉
やまたかへりこぬとほつくにゝよみ
乃界丹蔓都多乃各各向
のさかひにはふつたのおのがむき〳〵

天雲乃別石往者
あまくものわかれしゆけば
闇夜成思迷匍匐所射十六
やみよなすおもひまどはひいゆしゝ
乃意矣痛葦垣之思
のこゝろをいたみあしがきのおもひ
乱而春鳥能啼耳鳴
みだれてはるとりのねのみなき
作味澤相宵晝不云蜻
つゝあぢさはふよるひるいはずかげ
蜓火之心所燎管悲悽別焉
ろひのこゝろもえつゝなげくわかれを

日本乃名くしはよ家
住むを志まきやまき
黄泉をよみとし
よみのさかひ　仙田冥途し
まくハやみと云し冥途
こも黒闇なるとも云和
語りよみと云ふやさし
なふれよのよのかきく
葛乃それわくるこ
とく死別せしとふ
葛の天地の皆飛詞し
やよ良まず　こていとハ
しり飛詞しつるなて
のハ小をいてよの飛詞
先住ハ枯葉乃能され
こりされての飛詞し

反歌

別而裳復毛可遭所念者
わかれてもまたもあふべくおもほえば
心亂
へこゝろみだれて
一云意盡（ココロツクシテ）而
吾戀目八方
われこひめやも

蘆檜木笑流山中尓送置而
つれひさしかあるらんをとりまて
迷良布見者情苦
かへらふとれいこころくるしも
衰

詠勝鹿真間娘子歌一首并短謌
ルカツカノニ マノヲトメ

高橋連蟲麻呂

鶏喰吾妻乃國尓古昔尓
有家留事登至今不絶
あるとくるこころくいてかよるす

言来久之時壮鹿乃真間乃手兒奈我
いひくるかつしかの真間乃てこな
麻在尓青衿雁木乃
あさきぬのえりをみさかの
不二嶺者織眼而髪谷母
ふしねはおりめをかみさかも
不著直
つけすなをりまくかみつ
佐麻牛巣者雁乃
さまうすはかりの
鴈者不来成
かりはきなくなる
雖行錦之綾中毛著
ゆけともにしきのあやのなかにも
有齒兒毛妹尓将及我曽
あるといもしいもかもとわれそ
月之満有面輪二如花
月乃みてるおもわにはなの
立有者姦蟲乃念
たてるかことくそれかおもふる
之如水門入尓船已具如久
のことみなとにふねこくことく
歸香具礼人乃言時
きかくれひとのいふときに
幾時毛
いくときも

不生物無何為跡嬴身平田名
いけるものとなるふすまの男をしまの
知而浪音乃驟湊之
きりてお𛀁れこころさくみをと乃
與津城尒妹之助り勢流遠代か
おきつきまいもこやせるこまさらに
有家類事平昨日霸特見
なりくることをきのふも乃くん
我其登毛所念可間
こともおもかゆるる

反歌

勝壮鹿之真間之井見者立平之
かつしかの真間の井見れば立ち平し
水掬家年手兒名之所念
水をくみけんてなをもそこふ

見兔原處女墓歌一首并短歌

高橋連蟲麻呂

葦屋之兎名負處女之八年兒
葦屋の菟名負處女の八年兒
之片生乃時従小放
の片生の時ゆ小放
乃髪乎阿礼上奴尒
の髪を阿礼上げず尒
多久麻度尒並居家尒毛
たくまどに並び居る家にも
不見虚木綿乃白妙乃
見ず虚木綿の白妙の
袖指交而劣戸雖
袖さし交へて劣と雖
見而師香跡悃憤時之垣廬
見てしかと悃憤時の垣廬
成人之挑時智奴壮士宇
なる人の挑む時智奴壮士宇
奈比壮士乃廬八燎須澄師
なひ壮士の廬八燎す須澄し
競火之如久
競火の如く
相結婚尒相
結婚ひしけむ

者焼太刀乃手頴押祢剣白
うはやきさ〻らのうちひをよりおりさつ
檀乃靭取及而今永
まゆみゆきさらりおひくるよりいそり
大伜毛将又跡立向競
ゆもいくんとゝもむのひきさひ
時伜吾妹子之毋伜語久
ききまわきもこりをさりおくく
虚木綿ウツユフと和ス日本紀ニ内木綿トイフモ心未綿いくる神まさく
らいつまくも汎訓ニ又云ユフモ同ト云ヒ相通ヒ髪セル男
かきみすす又安云人ノ下ニテ〻まれ〻心ひせさ時のしいかりし
人乃いとも叫けさ入ラもしそひるへ〻そさらしてしけ安といそのし
山やらし〻えいをもわ。を伏なか火燃て煤ル心を云ふくま
すしきさひ又安云すケきをものくし系きさひのりそ
あひよりしイあれさらケ二人の男弟ルかひとぞ小叫みとをさ汁肉
やきさらカさもをおりいぬんこそをひとハ太刀乃柄を云ふくさハ肋
字心又安云をおりいぬんこそをひとハ太刀乃柄を云ふくさハ肋
或説を当りしゆさをおと云日本紀一ニ振起弓弾急堤劔柄ニ注ス

賤ノ乃意之故大丈之
係父女手纏
きつゝもりき賤限心
きつゝ乃をまゆさ
円やさきの枕ケこ
ルかり女の毋より
いくりそもおこ
よのはそこそも
きくくもりんやまこ
くもなこと
きくくろそみ仙よ
みとのつよまをり
こみ汎訓かの〻汎訓
よ完申とゝ肉寄ふ
とつくそ重ねの
肉乃あ名ふくよそ心
哥よさくろうよ
いおりとのうの

荒争見者雖生
応答
有敢完串戸黄泉尓将待
隠沼乃下跡
あれやきさんと
これねのきつこそへとさてうちあけ
きいしりいねもハちぬねもこの
妹之去血沼壮士其
夜夢見取次寸追去
ねりめのくきりてさを
きくれいをれるうあいねこいい相
郎礼婆後有免原壮士
仰天叫於良妣頃地
あきくさくひくつら
平喫連怒而如巳男尓
及而者不有跡懸佩之小釼
まくいけをまれをそも

取佩冬著嬢都良尋去和礼婆
とりそなへ　さねつ　けきゆきかれい
親族共射帰イトキ集永代亦
やつこらも　いよりおつより　おろきたに
棟梁為跡遍代亦語
ためやそんしめと　らをさたに　つるあ
将継常處女墓中亦造置
けんと　ためつ　おろよけそりをき
壮士墓此方彼方二造
おとこつの　こるつ　ふけそり
置有故縁南西雖不知
をろりゆ　よりて　きて　ねら
新喪之如毛哭泣鶴鴨
ふるもの　ねるきつるも

さくしをりくさくしをりて
きくみけりく　乙安云きこもをろきくいふ　と
ふるところをみるきいふところをそくいふ　玉葉六万の巻これふみてそくひ
さねつつ　おぬねられいにぎてこいえん泣ひくいふ　てくゆふ　つきてしひ男もも
つ有報をそくうせつそ　やつこは男女乃一族うも
ふるものこころ　乙安云古乃別をきていれられのやきる報よ彩喪の如
こうも　并毛ゴト

友歌

葬屋之宇奈比處女之奥柳乎
ひろりやのうねおそめりねきつきを
往ゆく来跡見者哭耳之所泣
ゆきくと乙くいねのくしあうる
墓上之木枕靡有鴨
けりうう　れこのそるひりりかの
陳努壮士亦之依倍家良信女
ちぬおとこみしよるくりも

萬葉集巻第九終

天和三年二月十六日漆筆而同廿七日注解此一巻了
灯下終書冥之功矣

享二年十月二日重
而添筆而同十五日於